不良学生の淡い恋

まぁみん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不良学生の淡い恋

【Ｎコード】

Ｎ２５０５Ａ

【作者名】

まぁみん

【あらすじ】

とんでもない不良生徒が恋をして、すこし変わっていく話です。

一；給食費の罠

俺は、毎日退屈だった。
大人が、俺にいつも説教するときの一言は決まって、
「お前も丸くなれ。」
だった。
そんなの糞くらえだった。俺は丸くなんてなれなかった。だから毎日喧嘩して、喝アゲして。
それじゃだめだってことなんかわかってた。わかってたけど丸くなんてなりたくなかった。
いつも俺に説教する大人どもの言う
「丸い人間」になんて、なりたくなかった。
だけどそんな俺が、ある奴を知って変われた気がするんだ。
今日は、そのときの話をしてみたいと思う。気入れて読んでくれよ。

それは俺が中二の頃だった。その頃には俺はちっとは有名な不良で、学校で俺に話しかけてくる奴なんか一人も居なかった。学校でなにか事件が起こるたび俺が疑われる。今日もクラスの誰かの給食費がなくなったらしい。俺はすぐに生徒指導室呼び出された。
「お前、盗まれた給食費知らないか？」
そう俺に聞いてきたのは生徒指導の・・・名前はなんていったかな、教師なんか大嫌いだから名前なんて覚えてないけど、まぁ、生徒指導の教師だ。
「知らねぇよ。」
俺は、他人の給食費を盗むほど金に困っていなかった。
そんな俺の言葉を無視するように教師は言葉を続けた。
「お前が何でそんなに荒れてるかは知らないが、他人の物を盗むのは最低だ。」
教師は、警察が泥棒に言うような、諭す口調で話し出した。

俺はこんな奴の話なんて聞いちゃいなかった。だって俺は盗んでないんだから。
教師は延々と説教をした後、俺に盗んだ金を返せとまで言ってきた。
「早くこの問題が解決できれば、相手だってあまり傷つかずに済むんだぞ。」
俺はこの言葉にキレた。言葉では言い表せないほどキレた。
「ふざけんな！コラァ！俺が取ったって証拠はあるんか？あぁ？テメーいい加減なこと言ってっとぶち殺すぞ！」
そう言って俺は相手の教師の胸倉をつかみ殴りかかった。
そのとき生徒指導室の扉を開けて‘女’が入ってきた。
「やめて！あなたが先生を殴っちゃったら、その罪を認めてることになるのよ。」
‘女’が俺にそう言った。
俺は、その女が誰か知らなかったので、喝アゲするときのようにこう言ったんだ。
「テメーに関係ねぇだろうが！黙ってろや！」
だけど女はおびえる様子も無く冷静にこう言った。
「黙らない！だって私はあなたが盗んでないことを知ってるから。」
俺はその言葉を聞いて驚いた。これまで俺のことを弁護してくれる奴なんて居なかった。
担任の教師ですら、俺が金を盗んだと思っている有様だ。
そのとき、教師が口を開いた。
「話を聞かせてくれるか？え～と、お前は確か二年一組の・・・。」
教師はこの‘女’の名前を知らないらしい。
‘女’がそれに呆れる様子も無く。
「安部リサです。」
と自己紹介をした。
「あぁ、安部か。で、こいつが盗んでないのを知ってるってどういうことだ？」
教師がさも、信用してなさそうに聞いた。

一応聞いておく、見たいな感じだった。
そのときには俺も落ち着いていたので、椅子に座って安部の言うことを聞いていた。
「はい、給食費は盗まれていないんです。あの騒ぎは、竹下君のことを嫌っている男子たちが盗まれたふりをしているんです。」
竹下、これは俺の名前だ。この機会に自己紹介しておこうか。
俺の名前は竹下透。年は、中二だから十四歳だ。
誕生日は・・・まぁ、そんなことはいいか。
で、この安部とか言う女が言ったこととは。
まず、金を盗まれた男子というのは前に俺がぶっ飛ばした奴らしい、そのときのことを恨んでいて仕返しをしようと企み、実行したというわけだ。
「なんで、私がこのことを知っているかというと、昨日の帰りあの人たちがこのことを話しているのを聞いたからです。だから今日あの人たちをずっと見てたら竹下君が学校に来る前に給食費を二年の男子トイレに隠して、竹下君が学校に来たら騒ぎ始めたんです。」
ここで、教師は安部に聞いた。
「それは本当の話か？」
安部はすかさず、
「はい。ここにその盗まれたって言われてる給食費を持ってきました。」
そう言って、自分のポケットから給食費の袋を取り出した。
「うむ、ここに給食費があるってことは、お前の言うことは正しいらしいな。
　良かったな竹下、金がこうして出てきて。じゃあ二人とも今日は帰っていいぞ。」
そういって教師は生徒指導室から出て行った。
俺は、黙って安部にお礼を言うことなく部屋から出ようとしたら、安部が声をかけてきた。
「ねぇ、一緒に帰らない？」

俺は驚いた、この俺と一緒に帰りたいと言う女、いや、人間がこの世に居たなんて。
俺は、いつもの人を遠ざけるような口調で。
「・・・なんでアンタと一緒に帰らなきゃいけないんだ？意味分かんねぇし。」
と言ってさっさと帰ろうとすると、
「いいじゃん、もう外暗いし、一人じゃ怖いよ。」
安部にとってはこの言葉は心底本当らしかった。俺は今日のことに一応感謝していたから、しぶしぶ了承した。
「・・・わかったよ。お前ん家どの辺り？」
遠いかったら嫌だったので聞いてみると、
「そんなに遠くないよ。歩いて二十分ぐらい。ここからだと向こうのほうかな。」
安部が指をさしたほうを見ると見事に俺の家と反対方向だった。
俺はため息を付き、
「さっさと行こうか。」
と言って生徒玄関のほうに歩き出した。

一；給食費の罠（後書き）

この話は十話までで終わらすつもりの短い物語です。最後までお付き合い下さい。

二；事故

俺たちは二人で夜道を歩き出した。
端から見れば恋人同士のように見えるのだろうか。
そんなことを少し、少しだけ考えながら歩いていると安部が、
「今日はびっくりしたでしょ？いきなり生徒指導室に乗り込んで。」
と恥ずかしそうに話した。
俺は、興味もなさそうに、別に、と一言言っただけだった。
「あのね、私許せなかったの。昨日帰り聞いてたら。堂々と仕返しするんじゃなくて・・・。
仕返しは良くないんだけど。堂々としないなんて最低だと思った。だから今日、先生に真実を
知ってもらいたくて、乗り込んだの。」
と安部は話した。俺はそれを黙って聞いていた。
「でもね、こういうのも悪いけど、竹下君にも悪いところはあると思うのね。怒らないで聞いて欲しいんだけど、竹下君が喧嘩しなければあの人も今日みたいなことはしなかったはずだよね。」
と安部が俺に話した。
俺は、安部が俺のことをわかったように言う言い方が妙に気に障った。
だけど、今日俺の弁護をしてくれたということもあって、俺はぎりぎりの状態で安分の言うことを黙って聞いていた。もう少し、安部がなんか言えばぶん殴る準備はできていた。
しかし、安部は俺の状態に気が付いたのか、それからはまったく違う話題で話をかけてきた。
好きな歌手がどうだとか、学校の友達がどうだとか。俺にはまったく興味の無い話だった。
それからまもなくして、安部の家に着いた。
「私の家ここだから。送ってくれてありがとう。」

そういって家の中に入っていった。
俺はそのまま家に帰った。今日安部が言っていたことを思い出しながら。

次の日、早速あいつを呼び出してボコボコにしてやった。入院二週間ってところだろう。
当然、今日もまた生徒指導室で説教だ。お決まりの「丸い人間になれ」という話を延々二、三時間聞かされ、終わりとなった。
俺は別に悪いことをしたという感覚も無く。下校しようとして生徒玄関に向かうと、安部が一人立っていた。よく見てみると泣いているようだった。
俺はそんな安部を無視して帰ろうとすると、一言安部が、
「何で喧嘩するの？」
と聞いてきた。俺は面倒くさそうに、
「そんなんお前に関係ないだろ。」
と言って帰った。
その翌日学校に行くと、安部が来ていなかった。今日は珍しく朝から来ていた俺は、朝のＨＲで担任の話に驚愕した。
「昨日、下校途中安部さんが事故にあいました。あぁ、そんなにひどい怪我じゃないらしいですので、一週間もすれば学校に来れるそうです。」
俺は、教室を飛び出した。理由なんてわからなかった。だけど安部が事故にあった原因が俺にあるような気がして、俺は一目散に安部の家に走っていった。

二；事故（後書き）

第二部分です。恋愛小説って始めて書くのでおかしいぶぶんもあるでしょう。皆さんの感想をお待ちしています。

三；お見舞い

俺は、安部の家の前に居た。
どうやって入っていけばいいんだ。インターホン押せばいいのか。
分からない。人の家に行くなんて今までなかったことだから。
そんなことを家の前で考えていると、玄関から誰かが出てきた。
俺は、突然のことだったので隠れることが出来なかった。
女の人だった、若い、安部の母親だろうか？いや、姉だろうか。
その女の人が俺に気づいたようだ。
「あれ？もしかしてリサのお見舞いに来てくれたの？」
俺は、言葉を発することなく、頷いただけだった。
「あら、そうなの？でも今は学校の時間じゃない？学校に戻ったほうがいいんじゃないの？」
女の人が、俺にそう聞いてきたが俺は首を横に振り、一言こう言った。
「・・・俺のせいなんです。」
女の人は驚いていた。
「ま、まぁ、入ってちょうだい。二階の部屋にリサ居るから。私は仕事だから居ないけど、話が済んだら学校に行ってね？」
と言って、出かけていった。
俺は、二階に上がっていった。
部屋の中から声が聞こえた。
「お母さん？まだ居たの？早く仕事行ってよ。私は心配ないから。」
俺は、部屋の戸を開けた。
安部は驚いていた。
「竹下君・・・。」
俺は、他人の、しかも女の部屋なんて入ったことが無かったから、
「入ってもいいか？」
と聞いていた。

「う、うん。どうぞ。」
安部は俺がなぜ自分の家に居るのか理解できてないようだ。
俺は、安部の部屋に入ると、ベッドの横に座った。
「怪我は？ひどいのか？」
俺は、素直に自分が思っていることを聞いた。
「怪我は全然ひどくないよ。相手の車もそんなにスピード出してなかったし。」
俺は、安心した。
次は、安部が俺に聞いてきた。
「何で、竹下君がお見舞いに来てくれたの？」
安部にとっては俺が見舞いに来たことが相当不思議らしい。
俺は、黙っていた。正直に話すのが怖かった。
人に自分をさらけ出すのが怖くて仕方なかった。
安部は黙って待っているようだった。
俺には、その沈黙が永遠のように感じられた。
俺は、また素直になれず、別に、とつぶやいただけだった。
その後も、会話などは無く、時間だけが過ぎていった。気づけば、昼になっていた。
「あ、もうお昼だね？ご飯食べようか。竹下君どうする？」
安部が起き上がろうとしていたので俺は驚いた。
「寝てろよ。怪我してんだろ。飯ぐらい俺が買ってくるよ。」
そういって部屋を出ようとした俺を安部が呼び止めた。
「待って。下の冷蔵庫に、お母さんが作ってくれたご飯があるから。電子レンジであったためて。買ってきてくれなくてもいいよ。二人で食べよう？」
俺は、頷き、下の階に降りていった。少し探すと冷蔵庫があった。中を見ると、栄養がありそうな食べ物がたくさんあった。
俺は、その中の二つを取り出し、電子レンジに入れて暖めた。
しばらくすると、暖まった。俺は、それを持って部屋に戻った。
「ありがとう。じゃあ食べよう。」

と言って、起き上がった。
俺は、安部にご飯を手渡すと、
「俺は、これで帰るわ。じゃあ、早く治せよ。」
俺は部屋を出て行くときに、ボソッとこう言った。
「昨日は、悪かったな。」
そう言って出て行った。
その後、俺は学校に戻る気にもなれず、家に帰った。

三；お見舞い（後書き）

このままだと、十話までで、終わらないような気がしますね。でも、がんばって書いていきますよ。

四；仕返し

俺は、それから一週間学校に行かなかった。
何故かは分からない、ただ行きたくなかったんだ。
一週間の生活は別に前と変わらなかった。町に出ては、喧嘩をした。
俺が学校に行かなくなって六日目、事件が起こったんだ。
俺はその日も町のゲーセンに居ると、後ろから肩をたたかれた。
「ちっ！いいとこだったのにな。何だテメーは。」
と、相手にすごんで言ってみた。
「会いたかったぜぇ！テメーに病院送りされてから、ずっと殺してやるって思ってたんだ。」
どうやら、俺が前にぶっ飛ばして病院送りにした奴らしい。
「殺すだぁ？やってみろよ！」
相手に殴りかかりながらそう言うと、後ろから衝撃が走ったんだ。
「がぁ！なんだ？」
俺は頭に手をやると、血がべっとりついた。
相手は二人だった。しかも、鉄パイプを持ってやがったんだ。
それから俺は、路地裏に連れ込まれ、ボコボコにされたんだ。
腕の骨は折れ、あばらも何本か持ってかれた。
「ははは！ざまあみやがれ！」
そう捨てぜりふをはいてあいつは去っていった。
俺はしばらくして気を失った。
次に気づいたら病院のベッドの上だった。
どうやら、誰かが救急車を呼んでくれたらしい。
不思議と怒りは湧いてこなかった。
自業自得だと分かっていた。今までの俺には無かったことだ。
なぜこんな気持ちになったのか、こんなことを考えていると安部のあの一言が頭に浮かんだ。
「なんで喧嘩するの？」

俺は、頭の中でこう答えた。
「自分の居場所が欲しいんだ。」
翌日、俺は痛む体を引きずって学校に向かった。
いつもは、二十分あれば付く距離が、今日は一時間掛かった。
教室に入ると、みんなの目は俺に注がれた。
どいつの目にも、
「ざまあみろ。」
という言葉が浮かんでいるように見えた。
放課後、安部が俺に声をかけてきた。
「竹下君、その怪我どうしたの？」
俺はまた、別に、と答えただけだった。
「そう、大丈夫？」
俺は、この質問が頭にきた。
大丈夫じゃなかったらこんなとこに居ない。
でも、いつもよりは頭にこなかったんだ。
何故だろう、いつからこんなに冷静になった。
いや、分かっている。安部が俺に話しかけるようになってからだ。
俺は、黙って安部を見た。
安部の目には心配の色がありありと見えた。
俺は、穏やかな、出来るだけ穏やかな口調で、
「大丈夫だよ。気にすんな。」
と答えた。
「そう、良かった。あ、この前はお見舞いに来てくれてありがとうね。」
安部は笑顔でそう言い、じゃあまた明日ね。と言って去っていった。
俺は、そのとき今まで感じたことが無いような気持ちになっていた。
「また明日・・・か。」
その言葉をかみ締めながら俺は家に帰った。

四；仕返し（後書き）

がんばって書いてますよ～！

五；転校生

あれから、数ヶ月経った。俺の怪我は完治していた。でも、前のように見境無く喧嘩を売ることは少なくなった。
今日も、いつものように遅れて学校に行くと、玄関で見たことも無い奴が同じクラスの奴と喧嘩していた。いや、それは喧嘩とは言えなかった。あまりに一方的だった。
俺は、それを黙ってみていると、見たことも無い奴が俺に向かって。
「なんじゃ、見せもんと違うぞ。」
と言った。
俺は、それを黙って聞いていた。そして相手をなだめるように、
「もうそれぐらいでやめとけよ。どう見ても、鼻の骨折れてるぞ、そいつ。」
と冷静に言った。だが相手は、そんなことはどうでもいいというかのように。
「知らんわ。こいつが喧嘩売ってきよったんじゃ。」
俺が、少しおとなしくなってクラスの奴らは調子に乗ってきた。
前までは、俺がクラスに居るだけで、シンとしていた教室が、今では、とてつもなくうるさい。
今、玄関でやられている奴は、クラスの中心人物で、最近だれかれかまわず喧嘩を売っているらしい。
「まぁ、どうでもいいけど。お前誰だ？」
相手はすかさず、
「お前は、人に名前聞くときに自分から名乗らんのか？」
と言ってきた。さすがの俺もこの言葉にはちょっと頭にきた。
「別に言いたくないんなら無理にきかねぇよ。じゃあな、ほどほどにしとけよ。」
と言って、教室に入っていった。
教室に入り、席に着くと、さっき玄関で喧嘩してた奴が入ってき

た。
そいつは、俺の横の席に座り、俺に向かって、
「俺は、島村豊言うんじゃ。お前はなんて名前だ？」
俺は、興味もなさそうに、
「竹下透だ。」
とボソッと言った。
「ふ～ん。透ね、よろしくな。」
と、それっきり机に伏して寝てしまった。
「・・・転校初日なのに図太い奴だな。」
それから放課後まで島村は寝ていた。玄関で、ボコボコにされていた奴はその後、すぐに病院へ運ばれたらしい。誰がやったかはわからなかったそうだ。俺は、別に言うつもりはなかった。
放課後俺が帰ろうとしていると、島村が声をかけてきた。
「アンタ、クラスでも浮いとったな。嫌われとるんか？」
俺は、この問いに、
「知るか。」
と答えた。すると島村は笑いながら、
「そーか、そーか。嫌われもんか。」
俺は、この言葉が気に障った。
「てめぇ、喧嘩売ってんのか？喧嘩売ってんだったら喜んで買うぞ。」
そう言って相手の出方を見ていると。
相手は、待ってましたとばかりに、
「いやぁ、弱い相手にうんざりしとったんや。相手になってくれるんか？」
と、言って体育館の裏に向かった。
俺は黙って島村に着いていった。
「入院しても、俺を恨むなよ！」
そう言って相手に殴りかかった。
島村は殴りかかった俺の拳を避けて、

「ははっ！そんなにせっかちになるなよ。」
と言って、左手で俺の顔に裏拳を喰らわした。
俺は、もろに裏拳を喰らって後ずさった。
島村の腕をつかんで引き寄せると、頭をつかみ、思い切り膝に叩きつけた。
「ぐっ！」
そう呻いて、島村は倒れた。
「ふぅ、久しぶりに膝蹴りするといてぇな。」
俺は、服を整えて帰ろうとすると、島村が、
「ま、まちぃな。ちょっと話でもせんか？」
と言ってきた。
「話しだぁ？なんでついさっきまで喧嘩してた相手と話すことがあるんだよ。」
俺は、さっさと帰ろうとしていると。
「お前も俺と同じだろう？大人や、社会が気に入らんくてつっぱとるんやろ？
　でもな、一人やとつらいやろ？俺らは同類や、お前もわかっとるやろう？」
俺のことをわかったように話してきた。だが、俺は否定できなかった。
島村の言っていることは事実だ、俺と島村は似ている。大人や、社会を冷め切った目で見つめる目や、社会になじむのが嫌でつっぱるところ。
「分かったようにいいやがって。しょうがねぇ、話でもするか。」
俺たちは、タバコを吸いながら長い時間話をした。

五；転校生（後書き）

第五部分には、恋愛要素はでませんでしたが、これからがんばって話を深めていく予定です。最初の予定より長くなりそうですが、お付き合いください。

六；イジメ

次の日から、俺と島村は友達になった。まだ親友と呼べる仲ではないけれど、俺には充分だった。
二人で居るときはつまらない社会のことも忘れられた。俺は、島村と仲を深めるにつれて穏やかな性格になっていったんだ。
俺は三年に進級した。うまい具合に島村も、安部も同じクラスになった。
三年に進級して二週間が経とうとしていたときある事件が起こった。この事件が、俺の中学校生活を荒れたものに変えていくなんて誰も思っていなかっただろう。

俺は三年になって真面目に学校に通っていた。喧嘩もしなかったし、学校をサボることも無かった。
ある日、俺がいつものように駐輪場に自転車を停めて教室に行こうとすると、駐輪場の隣にある体育倉庫から声が聞こえてきた。その声があいつ以外の声だったなら俺は気づかなかっただろう。その声は、安部の声だった。
俺は、すぐにでも倉庫内に入って行こうという気持ちを抑えて、耳をすまして中の声を聞いていた。
「あんたさぁ、マジむかつくんだけど。竹下と仲いいからって調子に乗るんじゃねぇよ！」
そう言って女子が三人ぐらいで安部をいじめている現場を見てしまった。
「あたし調子になんか乗ってないわ。」
安部は、毅然とした態度でいじめっ子たちに言い返していた。
「そういう態度がムカツくんだよ！」
そう言い放って安部の髪をつかみ、顔にビンタを放った。
ここまで来ると俺も黙っちゃいない。

倉庫の扉を開けて入り口に立ってこう言ってやった。
「あのさぁ、いじめるのは勝手なんだけどさ・・・。いじめる理由に他人を使うな！」
最後の一言を強めに言って、すこし脅し気味に言った。
「ちっ、あんたの強いナイト様は来たよ。」
そう捨て台詞をはいて女子共は去っていった。
「大丈夫か？ビンタされたろ？」
穏やかな口調で安部に聞いた。
突然、安部が泣き始めた。
「・・・なんで私がいじめられなきゃならないの？」
安部はそれから十分ほど泣いていた。
俺は安部が泣き終わるまでずっとそばにいてあげた。
いや、そうすることしか出来なかった。
俺は考えに考えて、一言こういった。
「・・・俺がちゃんと守ってやるから。」
この一言しか思いつかなかった。安部は俺の一言を聞いて、笑いながらこういった。
「ふふっ、ありがと。なんか嬉しいよ。」
俺は、安部に顔を向けることが出来なかった。なぜならこれ異常ないほど真っ赤になっていたからだ。
「・・・そんなに喜ばなくてもいいよ。じゃあ、俺もう教室行くから。」
俺は倉庫から走って教室に向かっていった。走っている途中俺は自分の気持ちに確信した。
俺、安部が好きなんだ。いつからだ？最初からか・・・。

六；イジメ（後書き）

少し間が空きましたが、第六話投稿です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2505a/

不良学生の淡い恋

2010年10月10日00時55分発行